

木山捷平短編小説賞 今までの受賞作品



回	年度	氏名	作品名	あらすじ(または、作品紹介)
第1回	平成17年度	牛山 喜美子	最終バス	【作品紹介】舞台は信州の山に囲まれた町。寒天づくりが盛んだ。主人公の小学4年生、寿々子の家も寒天づくりを営んでいる。寿々子は本が大好きな少女。ちよっぴり背伸びして、町の図書館で『魅せられたる魂』や『月と六ペンス』を借りたりする。作者はそんな寿々子をユーモアを込めて描く。往時の自分をかきねあわせているのかもしれない。バス通学している転校生の修治との幼い恋めいたほほえましいやりとりも印象的だ。
第2回	平成18年度	木下 訓成	マルジャーナの知恵	木村啓之助は72歳で、数年前に大工仕事から引退している。彼の唯一の趣味はキノコ狩りである。ある晩秋の早朝、近隣の極楽寺山へ「アカモミタケ」の採取に出かけるが、込み入った間違いやすい場所なので昨年、目印のために馬酔木の幹にビニールテープを巻きつけておいた。ようやくその目印を見つけて灌木の中へ入り込むが、なかなか目的のシロが見つからない。と、かなり下の方から物音を聞きつけたので下りてみると、自分のシロで十歳くらいの少年が、すでに「アカモミタケ」をほとんど採りつくしていた。少年との会話がすすむうち、その少年が啓之助の子供の頃の同級生で彼がひそかに思いを寄せていた女性の孫であることが分かった。マルジャーナとは、もちろんあの『千夜一夜物語』の中の「アリババと四十人の盗賊」に出てくる、賢い女性の名前である。
第3回	平成19年度	紺野 真美子	背中への傷	万作は息子の嫁、杏子の父親である庄吉の葬式にでるため空路福岡へ向かう。庄吉は亡くなる半年前に万作に一通の封筒を託していた—自分にもしものことがあったら杏子にこれを渡して欲しい。東北の地で農業と出稼ぎに精を出してきた万作と、会社を経営する裕福な庄吉。共通点のない二人は、数少ない係わりの中でお互いを認め合っていた。万作は封筒の中を見てはいない。しかしそれが杏子の背中にあるという深い傷痕と関係しているのではないかと思っていた。父親の通夜、葬儀の場にあっても泣かない杏子を家族がそれぞれに気遣う。庄吉の最期を送ったあと、万作は庄吉からの預かり物を渡す。覚悟していたように重苦しい過去の出来事を語り始めた杏子は、話を終えたあと、庄吉への想いを、後悔を吐露する。「もう、いいでねが」万作の言葉とすすり泣く杏子の声が、晩秋の空に吸い込まれていった。
第4回	平成20年度	福田 敬	池	壮年期に家族とともに賑やかな生活を送っていた男は、定年退職を迎えると妻を亡くし、同時に愛娘も父親である男との交信を絶ってしまった。独居になった男は想い出の中に引きこもってしまい、中でも、幼少期の娘らと過ごした竹藪の中での日々が忘れられず逡巡していく。だが、疎遠になった経緯は理解できないでいた。孤独の中に暮らしながらも、無意識から出てきた山崎や蛇、猫、蛙らに導かれ己を見つめ始める。活気ある生活獲得に努力するも、目の前の若さに圧倒され、憧れはあまりに遠くにあった。時代の変化にも付いていけず、友人らも共にアル中問題を抱え離れていってしまう。外向きになろうとする反動は時に嫉妬が現れ、過去の栄光への拘りが強くなり余計に自堕落になってしまう。それでも、男の分身である山崎や動物らに助けられながら、二人の娘に会う勇気をもらう。
第5回	平成21年度	大野 俊郎	チヨ丸	藤崎和郎は祖母の白寿の祝いに出席するため、息子の凌を連れて奄美諸島のある故郷の島へ向かう。町長をはじめ二百名余りの人が集まる盛大な祝賀会だという。当日の朝、祖母は孫の藤崎を認識できず、亡き息子と間違えたうえ、祝賀会が催されることさえ理解していない。会場へは行かないと幼児のように愚図っていた祖母だが、曾孫の凌の言葉には素直に従い、ようやく祝賀会が無事に開催される。数時間に及ぶ宴会に祖母が耐えられるかと案じていた藤崎だが、参会者からの祝辞を笑顔で聞き、献杯の儀式にも応じている姿に安堵する。町長とも昔話をする祖母は認知症とはとても思えない。帰宅した祖母が母屋で凌と話しているのを藤崎は垣間見る。凌を孫の藤崎と混同して数十年前の思い出を話す祖母は、溺愛する孫と過す時間を愛しむように幸せな表情を浮かべていた。
第6回	平成22年度	福井 幸江	回路猫	雨の日には学校を休むと決めている中学生の「わたし」はある朝、雨の中ゴミ出しに難儀している白髪の女性を自宅の窓から見かける。ゴミ出しを手伝い杖をつく女を自宅へ送り届けると、朝食に誘われる。仲良く談笑し食事していると「話し声がうるさい」と隣人が踏み込んできて、部屋を荒らし二人に暴力をふるう。防衛のためとはいえ、はじめて他人を殴ったわたしは落ち込むが、女は平然と笑っている。わたし自身も自らの中にある攻撃性に気づく。ゴミ捨て場からこっそり拾ってきた本「回路猫」をもとに幼い頃の話をする、誰からもかわいがられないまま育った女が「読んできかせてくれ」と頼む。読み終えて女を見ると、目にたくさんの涙を浮かべているのだった。わたしは、行き場のないというハムスターをもらって家に帰る。

回	年度	氏名	作品名	あらすじ(または、作品紹介)
第7回	平成23年度	吉野 光久	異土	夏の高原で、私はまだら模様の美しい蝶、アサギマダラを偶然見かけた。遙か南の国から毎年夏に日本の山や高原に飛んできて、秋になると紀伊半島の岬から南方に帰る「渡り蝶」であることを知った。 そういえば、そんな蝶を見たと昔、岳父から聞いたことがあった。 「渡り蝶」のように、紀伊半島の枯木灘からは、明治の初めに多くの移民が海を渡った。岳父も岳父の一族もその中にいた。 蝶に背を押され、私は移民一家の百年の足取りをあらためて辿る気持ちになって資料を求め歩き、かつて会った一族の一世、二世たちの面影と記憶の断片をつなぎ合わせながら、楽土を求めて海を渡った者、戻った者それぞれに思いをはせた。 生きる土地、死ぬ土を選ぶということの困難な時代は、ついこの間のことであったのだ。
第8回	平成24年度	太田 貴子	雨あがりの奇跡	律子は、四年前から実の母カメノをひきとり、夫と息子の四人で暮らしていた。カメノは夕方になると、必ず紅をさし、マサコと名付けた人形を小型のベビーカーに入れ、散歩に出かけた。認知症で被害妄想の激しいカメノとの生活に、律子は疲れ、出口のないように思われる日々に希望をなくしていた。 そんなとき、突然カメノの妹で律子の叔母、千代子から連絡があり、律子は久々に大好きな叔母と再会する。そして、昔幼くして死んでいった律子のきょうだいは、男の子ではなく女の子だったと告げられた。亡くなったのは兄だと思っていた律子は、千代子の突然の告白に戸惑う。 ある日の雨あがり、律子は初めてカメノの散歩に同行し、律子の知らないカメノの一面を見ることとなった。帰り道、カメノは虹が見えると言って、地面をゆびさした。そこにはカメノだけが知っている「虹」があった。
第9回	平成25年度	西島 恭子	高那ヶ辻	母方の叔父、紀さんが死んだ。 入院中は一度も見舞いにも行かなかった後ろめたさの中、母の使いで遺体が帰って来たばかりの紀さんの自宅を訪ねた私は、枕元に座り安らかな顔を見つめながら、蘇ってくる遠い昔の記憶を一つ一つたどり始める。 幼い頃、盆と正月に里帰りする母に連れられて行った祖母の家、そこには貧しくとも陽気でたくましい祖母がいて、まだ若かった紀さんたちがいた。 ある年の正月、大雪で唯一の交通機関であるバスが不通となり、自宅に帰れなくなった私たち親子は、普段は父親代わりだった姉に何一つ逆らえない二十歳そこそこの紀さんの掛け声の元、山の向こうにある町の駅を目指しての峠越えを決断する。 母も若かった、紀さんはずっと若かった。 今なら考えられない、無謀な雪の日の冒険。今日まで三人とも思い出話に語ることなく来たが、物言わぬ紀さんの顔にハツとして、瞬間タイムスリップする高那ヶ辻での出来事。紀さん、憶えていますか。
第10回	平成26年度	真野 光一	本宮鉄工所	本宮鉄工所を訪ねてきた若い女性が、本宮に鉄の本を作って欲しいと言う。経営の苦しい小さな鉄工所だから何でも作ってきた本宮だが、鉄の本など作ったことがない。用途を聞くと父親の遺言で墓碑に使うと言う。死んだのは十年前に事故現場で一緒に救出作業をしたことのある同業の鉄工所経営者だった。女性は、通夜も葬儀も出せずに寂しく送った父親を鉄の匂いのする鉄工所に呼び戻し、父親が信頼していた人と鉄の側で父を語り、その言葉を鉄の本に綴じ込みたいと言う。本宮は女性に狂気のようなものを感じるが、女性の希望通り従業員を帰したあと、女性と二人だけの夜の鉄工所で鉄の本を作りながら記憶の中にあるその男性の物語りを始める。
第11回	平成27年度	金子 由実	お茶の時間	杏子は伯父に、家のリフォームに来る大工さんをお茶菓子でもてなすよう頼まれる。工務店の和樹は甘いものが好きだ。地元の銘菓をいつもおいしそうに食べる和樹の笑顔をうれしく思うと同時に、杏子は苦い過去を思い出す。幼い頃、杏子はまんじゅうが好きだった。しかし「好きなもの」に「まんじゅう」と答えたところ、同級生に「変」と笑われてしまう。それを皮切りに杏子は同級生にからかわれ、まんじゅうにトラウマを持った。お茶の時間、和樹に「この前食べたまんじゅうの店を教えてください」と頼まれ、二人で店に向かう。そこで杏子は自分をからかった同級生に遭遇し、嘲りの言葉を受ける。杏子は苦々しい感情を和樹に聞いてもらい気持ちを晴らす。二人で新商品のどらやき「虎次郎」を食べる。久しぶりに食べたまんじゅうの甘さは杏子の心を温かくさせた。杏子は「虎次郎」のイラストの虎のようにペコリと和樹に頭を下げ「ごちそうさまでした」と感謝を述べた。
第12回	平成28年度	高橋 達矢	極楽風呂	二十九歳の「僕」は、スーパー銭湯で一風変わった「老人」と出会う。老人の言動に困惑する「僕」だったが、会話するうちに心惹かれるものを感じて次第にうちとけ、「老人」に指南されるようにして銭湯の愉楽を実感する。ある日、悪い夢を見た「僕」は朝から銭湯に行き、再び「老人」と会う。「僕」はその日見た夢のこと(父親の自死の記憶を含む)を話す。「老人」は銭湯の種々の湯と地獄の光景を重ねる話をした後、自分の息子の出奔についてもふれる。「僕」の心を見透かしているかと思われる老人の言葉と、湯の玄妙な効用によって、「僕」は再生への希望を抱く。

回	年度	氏名	作品名	あらすじ(または、作品紹介)
第13回	平成29年度	梅津 里江	骨とトマト	フィリピン人の母と日本人の父の間に生まれた僕は、ひょんなことから父親筋の祖父の遺骨を預かることになった。父が蒸発して以来、何かと自分のことを気にかけてくれた祖父である。母がフィリピンへ帰国する前の三年間は、アパートの裏手にトマト畑を作って共に収穫したこともあり、僕にとっては家族としての蜜月のような淡い思い出になっている。僕は恋人の葉月と共に、そんな祖父の弔い方法を自分なりに模索する。日本で流行している海への散骨や納骨堂での弔いは、お金もかかるし祖父には似合わない。迷いの中で月日は過ぎ、僕は日雇いの仕事を掛け持ちしながら日々を繋いでいく。そんなとき、葉月の妊娠がわかった。僕は、アパートの裏にあるかつて祖父と共に作ったトマト畑を思い出し、そこに祖父の骨を肥料として撒くことに決め、慣習にとられない、自分なりの血縁の守り方に行き着いた。
第14回	平成30年度	鷲見 京子	鞆の中	村木美佐子は五十二才。両親も兄弟姉妹もない。四十になって結婚した夫との間に子どももない。歯科医だった夫は一年前病気で他界したが、遺産で何不自由ない生活をしてきた。正月も過ぎたその日は、俳句の同人(どうにん)(指導者)になった祝いの会を句友たちが計画してくれていた。会場へ向かう途中、駅のベンチで見ず知らずの女性キミエと出会う。みすばらしい服装をしたキミエは、震災で困窮し疲弊した東北の姉に渡すため、一千万円の現金を鞆に入れて持っていた。キミエは来し方を話し、夫にも内緒で四十年かけて貯めた金を見て欲しいと言う。美佐子は当惑し、見ることを断る。会話を交わすうちに訝しく思う気持ちは同情に変わり、畏敬の念まで持つようになる。鞆の外側から触って札束の感触を確かめ、姉を慕うキミエの思いに心が揺さぶられる。別れた後、俊しい暮らしのキミエに自分にはない豊穡を見出す美佐子。華やかな祝いの席で美佐子の孤独は募っていく。
第15回	令和元年度	川端 豊子	夕焼けの音	主人公の私は五十歳の女性で家政婦をしている。夫は単身赴任で、息子は就職して家を出た。家政婦紹介所から派遣された先の女主人、片桐落子(七十八歳)は耳が聞こえないので、手話ができる私が抜擢された。落子の夫、静夫は二年前に亡くなった有名な画家だ。私が落子に仕えた半年間の出来事が綴られる。二日間仕事が休みの間に私の友人、翠が突然亡くなり、葬式に行く。一方、落子には癌が見つかり二週間後に入院することになる。私は落ち込む落子を励ましたくて、落子が昔静夫と一緒に撞いたという禅寺の鐘をもう一度落子に撞かせるためにその寺へ連れて行く。寺の中の木立でけたたましい蟬の鳴き声を聞か、そこで蟬の死骸を見つける。翠の突然死を思い出して生の儚さを思い知る私。禅僧に導かれ落子が鐘を撞く。耳の聞こえない落子が全身でその音を感じる。入院の日、私のお蔭で色々な音を思い出すことができた、と落子から感謝される。入院してから数か月、落子を待ちながら落子の家の窓を開けると、私の耳に夕べの鐘の音が聞こえてくる。
第16回	令和2年度	三ヶ島 零	シルエット・R	港に流れ込む小さな川に跨がるようにして建つ古い長屋にただ一人、誰とも交流を持つことなく残された日々を年金で費やしていく日々だ。そうしたR老人のただ一つの生き甲斐は、町のあちこちに捨てられ、それでも生きていく野良猫達に毎日、餌をやることだった。冬も夏も、雨も風も厭わずに、朝、夕に餌を与える。その為に、自転車に跨がり、昔の重労働の故か極端に曲がった背中を見せて町中を巡回するのだ。そのシルエットは正にRの文字そのものだ。その猫達の一部が小学校の登校ルートにあった。児童の母親達は野良猫とそれに餌をやり続ける異質なRを嫌悪した。揚げ句、猫達は駆除される。Rは落胆の底に沈む。尚も、放火事件に巻き込まれながら、Rは心臓発作を起こし、ペースメーカーで新しい生を得る。人は人なくしては生き得ないことを悟り、近所の幼い子供との触れあいに、忘れていた物を取り戻すのだった。
第17回	令和3年度	阿壇 幸之	雪	年末、私は久しぶりに中国山地の麓に位置する町に帰省した。自らが生まれ育った町が雪に埋もれているのを見ながら私は懐かしさを感じると同時に、どこか嫌悪感を想起させた。それは、私の親や学生時代の教師の言語や思考が閉鎖的な農村社会的価値を旧態依然として維持していることに対する嫌悪感だった。一方で、社会科の教師であったM先生には私は好感を持っていた。大学の時、私と同じように、東京で暮らしていたM先生にはそういった「古臭さ」が感じられなかった。しかし、私の父によるとM先生は春に退職するらしく、見たところすっかり痩せてしまっていた。日が変わり、まだ夜が明けない頃、私は父と一緒に日の出を見ようと神社に行く。町の人間が集うその神社で、私はM先生と再会をする。M先生は、思いの外、元気そうで私は安心した。M先生と私は春に東京で会う約束をした。
第18回	令和4年度	佐伯 厚子	遠い入道雲	二十年前に夫が亡くなった時、息子が畑を人に貸してしまい、畑の二筋だけ米寿になってもフサは耕し、野菜を作っている。貸した畑にはビニルハウスが建てられ、技能実習生らしき若者が働いていた。ある時、畑で転んだフサは若者の一人に助けられる。それから、若者に自転車を貸したり、畑を耕してもらったりし、片言のやりとりでお互い農家の生まれで五人兄弟だとわかる。が、ミャンマー出身の若者は、国が紛争になって帰れず兄弟の無事もわからないという。フサは、戦争で亡くなった団子鼻の兄の面影を若者に見出していた。同じ村に同級生と共に看護婦として空襲、戦争を体験した友人、留子がいた。けがをした留子を見舞った帰り、偶然、若者と川のほとりで若者と出会い、ビルマでの兄の最期や自分の思いを語る。そこでフサはミャンマーとビルマが同じだと知って心が昂ぶったが、失意の若者を慮ってゆっくり知り合おうと決める。

